

申請者領域・氏名	病態制御科学領域消化器内科学教育研究分野 坂本 有希
指導教授氏名	福田 眞作
論文審査担当者	主 査 石橋 恭之 副 査 中根 明夫 大門 眞
<p>(論文題目) Proton Pump Inhibitor Treatment Decreases the Incidence of Upper Gastrointestinal Disorders in Elderly Japanese Patients Treated with NSAIDs (PPI 投与は NSAID 内服高齢者の上部消化管障害を減少させる)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>北日本農村部の高齢者では <i>H. pylori</i> 感染率は 70% と高く、萎縮性胃炎を有する割合は 60% 以上である。萎縮性胃炎の進展は胃酸分泌を減少させるが、これらの高齢者において低用量アスピリン (LDA) ・非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) 関連上部消化管障害の予防に、PPI による胃酸抑制が必要かどうかの研究は少ない。本研究では、併用している抗潰瘍薬と内視鏡所見の関係を調べ、NSAIDs ・ LDA 関連上部消化管障害の予防に PPI 投与が必要かどうかを検討した。</p> <p>対象は、弘前大学附属病院で上部消化管内視鏡検査を受けた 65 歳以上の LDA およびそれ以外の NSAIDs (NANSAIDs) 内服者 158 名である。潰瘍は長径 3 mm 以上で、ある程度の深さを有する粘膜損傷とし、出血を伴った潰瘍および出血性胃炎を出血性病変と定義した。結果は t 検定、χ^2 乗検定、Fisher の直接確率検定により検討し、Bonferroni 修正後に有意性を判定した。</p> <p>LDA 内服群では、PPI 内服者には潰瘍も出血性病変も認めず、H2RA 内服者は 10.5%、15.8%、MPA のみ内服者は 33.3%、8.3%、抗潰瘍剤非内服者は 33.3%、23.3% にそれぞれ潰瘍と出血性病変を認めた。PPI 内服者では MPA のみ内服者と抗潰瘍薬非内服者に比べ、消化性潰瘍の頻度が有意に低かった ($p < 0.001$)。NANSAIDs 内服群では、PPI 内服者は潰瘍を 11.1% に、H2RA 内服者は 40.0%、20%、MPA のみ内服者は 50.0%、40.9%、抗潰瘍剤非内服者は 75.0%、33.3% にそれぞれ潰瘍と出血性病変を認めた。PPI 内服者は MPA のみ内服者と抗潰瘍薬非内服者に比べ、潰瘍と出血性病変のいずれも認めない頻度が有意に高かった ($p = 0.004$)。</p> <p>本研究は、萎縮性胃炎を有する割合が高い日本人高齢者においても、LDA や NANSAIDs により潰瘍及び出血性病変が発生し得ることが示し、これらの患者においても H2RA でなく PPI のみが上部消化管障害を予防するために有用であることを示した意義のある研究である。さらに、下記の学術雑誌に本論文はすでに受理されている。以上から、本研究は学位授与に値する。</p>	
公表雑誌名	Internal Medicine